

自由連想法とクラスター分析による「合意形成」に対するイメージの研究*

Study on the Consensus-Building Overview by Free Association Technique and Cluster Analysis*

松本美紀**・高尾知佳***・入江秀晃****

By Miki MATSUMOTO**・Chika TAKAO***・Hideaki IRIE****

1. はじめに

近年、組織横断型プロジェクト管理や市民参画型の公共事業の実施など様々な場面で、合意形成・紛争解決手法の有用性が指摘され、その活用が広がっている。合意形成・紛争解決は古くよりある手法であるが、ワークショップなどの手法や、ロールプレイなどの教育手法、Win-Win といった概念など、比較的新しい方法論や概念が広がっている。このような動きには、交渉学、臨床心理学、法学、経営学、教育学など様々な分野が互いに影響を与えながら発展を見せており、専門家ですらその動きの全体像を見通すことは難しい。

そこで、本研究では合意形成に関する研究等に携わる諸分野の専門家、学生、コンサルタント、行政職員等を対象とし、「合意形成」に対する認知やイメージを抽出し、各立場における「合意形成」像について自由連想法とクラスター分析を用いて比較、検討を行い、立場による「合意形成」の概念の捉え方の違いについて考察した。

2. 方法

(1) 調査フィールドと対象者

対象フィールドは、合意形成入口知識研究会である。これは、合意形成に関する研究等に携わる研究者、大学院生、コンサルタント等によって校正され、2009年9月より、合意形成についての理解を深めるために結成された研究組織である。この研究会は毎月1回の開催を基本とし、必要に応じて不定期に開催している。現在(2010年5月)では、大学関係者6名(内、学生2名)、研究機関・行政関係者4名、コンサルタント関係者2名、の計12名が組織に所属しており、これまで8回の研究会を行っている。

*キーワード: 合意形成、自由連想法、クラスター分析

**正員、工博、国土技術政策総合研究所

(茨城県つくば市旭一番地、TEL:029-864-4239、

E-mail:matsumoto-m92tc@nilim.go.jp)

***非会員、工修、東京大学公共政策大学院

****正員、東京大学大学院

本調査の対象者は、2009年11月の研究会参加者であり、その内訳は、上述した本会所属者の内、大学関係者4名(内、学生2名)、研究機関・行政関係者4名、の計8名である。

(2) 調査方法

調査方法は、内藤によるPAC分析に準じた方法を用いた。PAC分析は、当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、対象者本人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて、個人別にイメージ構造を分析する方法である。

本研究では、対象者の立場による「合意形成」像の違いを検討し、それぞれの「合意形成」の概念に対する捉え方を把握することが目的であることから、テーマを「合意形成」とすることで、分析手法として、PAC分析を用いることが適していると考えた。

(3) 調査手続き

a) 自由連想法

自由連想法とは、与えられた刺激語に対して、回答者が連想した事項を自由な形式で記述していくものである。

本調査では、「合意形成」という刺激語に関し、以下のような設問を示し、回答を求めた。

設問:「あなたは、『合意形成』という言葉から、どのようなことを連想しますか? 連想されることを、単語、文章いずれの形ででもいいので、思いつく限り、書いてください。」

記載用紙は、その後の類似度評定を行いやすくするため、図-1のような表を作成している。図-1には、刺激後から連想した順に上から語句を記入し、それぞれの項目間の類似度を評定させた。

b) 類似度評定

類似度評定は、図-1に下記の教示と、評定尺度を印刷し調査対象者に提示することで実施した。

教示内容:

- | | | |
|---|-----|--------|
| 1 | ... | 非常に近い |
| 2 | ... | かなり近い |
| 3 | ... | いくぶん近い |

氏名()

番号は連想した語句です。 英語訳 文章	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26	No.27	No.28	No.29	No.30
No.1	0																													
No.2		0																												
No.3			0																											
No.4				0																										
No.5					0																									
No.6						0																								
No.7							0																							
No.8								0																						
No.9									0																					
No.10										0																				
No.11											0																			
No.12												0																		
No.13													0																	
No.14														0																
No.15															0															
No.16																0														
No.17																	0													
No.18																		0												
No.19																			0											
No.20																				0										
No.21																					0									
No.22																						0								

↑ 近い

1 ... 非常に近い

2 ... かなり近い

3 ... いくぶん近い

4 ... どちらとも言えない

5 ... いくぶんか遠い

6 ... かなり遠い

7 ... 非常に遠い

↓ 遠い

図-1 類似度評定表

表の左端に連想順に上から語句を記入し、右の類似度距離行列を図内の1～7の評定値で記載する。

- 4 ... どちらとも言えない
- 5 ... いくぶんか遠い
- 6 ... かなり遠い
- 7 ... 非常に遠い

c) クラスター分析

上記の類似度評定のそれぞれの数値を、類似度距離行列として1点から7点までの得点を与えたとみなし、対象者別にクラスター分析(ワード法)を行った。

d) 対象者間の「合意形成」イメージの比較

クラスター分析で得られた結果を基に、対象者それぞれが持つ「合意形成」のイメージについて解釈を行う。解釈は、対象者間で各々の結果について議論することでそれぞれの「合意形成」の概念の理解を、全体と比較しながら行った。

クラスター分析の結果の提示は、無記名とし、対象者から了解が得られた場合は、議論の中で自己開示をお願いした。

3. 結果と考察

対象者の連想項目及びクラスター分析の結果を、図-2に示す。事例A、B、C、Dが大学関係者であり、E、F、G、Hが研究機関・行政関係者である。

(1) 大学関係者の「合意形成」イメージ

a) 事例A、B

事例Aと事例Bは、「合意形成」に関する研究を行っている大学院生である。事例Aは修士課程2年生であり、事例Bは博士課程3年生であるため、「合意形成」の概念に関する知識度は高いと考えられる。

そのため、連想された語句は専門的な用語も多く確認され、それぞれが概念に基づいてクラスターを成している

結果が得られている。

また、個々の研究課題に関する疑問など、研究を進める上で必要だと考えられる用語などが連想されていることも特徴的である。

b) 事例C

事例Cは、主に公共事業における合意形成に関する研究を行い、その講義も担うことのある大学の教員である。

実際に合意形成の現場にも関わったことがあり、経験値、知識度ともに高いと考えられる。

結果、連想された語句は、専門性の高いものが多く、且つ、それぞれの語句が、理論的にクラスターを成していることが確認された。

また、信頼と不信のように、相対する言葉が同じクラスター内に分類されていたり、大きなクラスターの中でも細分化されたクラスターが混在しているなど、経験と理論的な知識が一致していない部分があり、「合意形成」の概念に対する複雑な考え方をもっていることが示唆された。

c) 事例D

事例Dは、社会人の博士課程に属する学生である。特に合意形成の現場に関わったという経験はなく、「合意形成」そのものに対する関心はあるが、知識が伴っていないわけではない。

そのため、連想された語句は、素朴な疑問系の言葉が多く、専門用語が少ない。誰にでも分かり易い言葉で、現在の「合意形成」における課題に対し、自身の意見を率直に出し、その考えをクラスター化していることが理解できる。

d) 事例E、F

事例EとFは、行政関係者である。両者共に、行政側の立場として公共事業に携わる経験がある。

結果からは、その立場上の課題が連想語に多く表れて

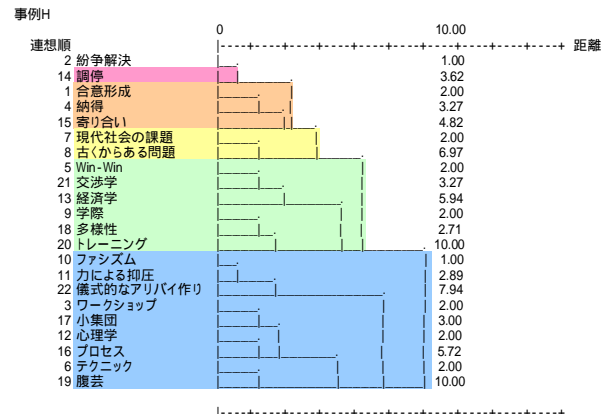
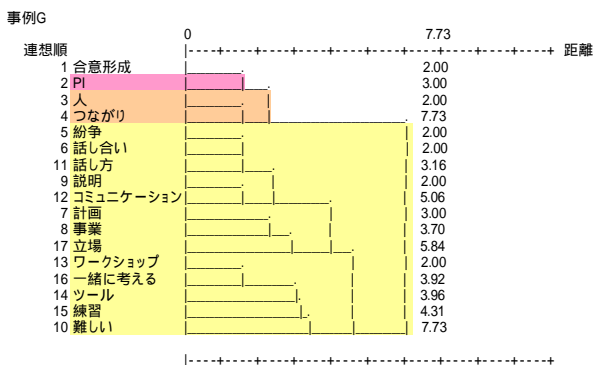
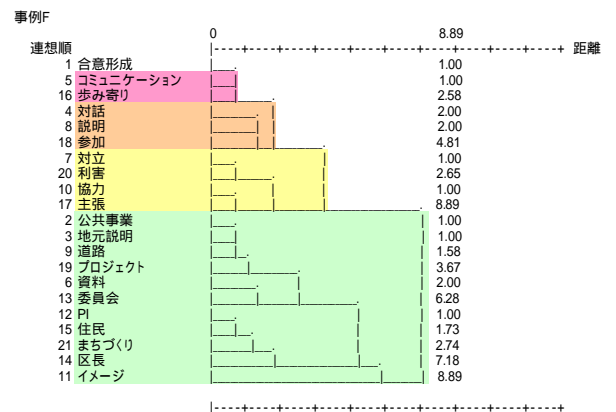
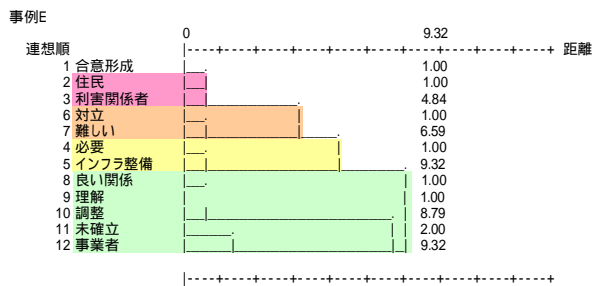
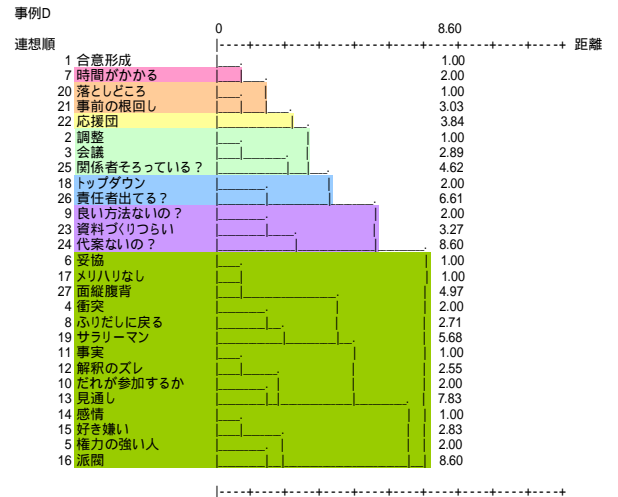
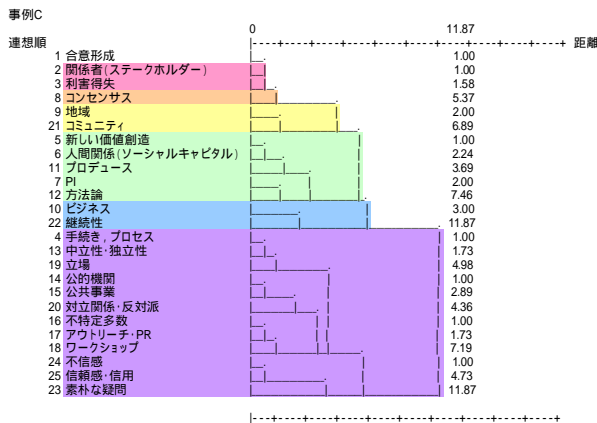
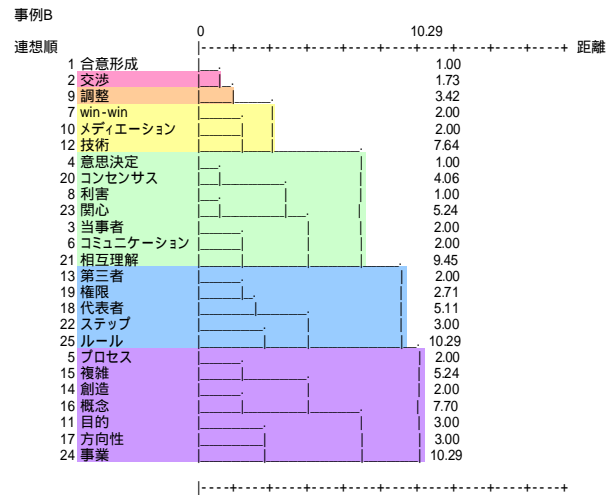
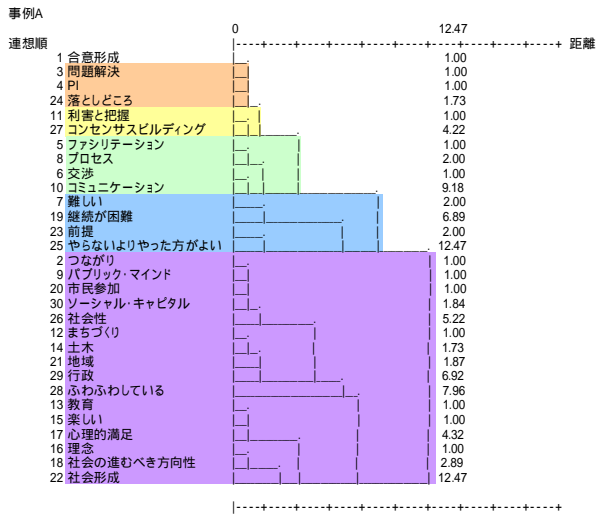


図-2 クラスター分析結果

いることが特徴として確認できる。

例えば、Eは「インフラ整備」と「必要」という語句が連想して表れ、それがクラスター構造を成している。また、「事業者」、「良い関係」という言葉が連想されていることも、行政の立場としての考えと解釈できる。

解釈の議論の中で、「未確立」という語句について、「合意形成」の手法の確立を意識していることが、Eより発言された。行政として今後、どのように「合意形成」を進めていくべきか、模索しているというイメージ構造が得られたと考えられる。

Fの場合も、ほぼ同様であり、「公共事業」、「地元説明」、「委員会」等の、自身の立場や経験から連想された言葉が結果として得られている。

e)事例G

事例Gは、以前は別研究機関に所属し現在は下行政関係者である。合意形成を専門とした研究を行っており、ファシリテーターの経験もあり、知識度は高く、経験値も高いと考えられる。

結果として、「合意形成」の基本となる、態度や姿勢に関する語句として「一緒に考える」等の言葉と「ワークショップ」などの実践的語句、そして「難しい」という主観的意見が入り混じった、クラスターが得られた。

また、「紛争」という語句が連想されているのも、Gの特徴であり、この点について、解釈を議論すると、Gの経験から、現場における紛争解決の難しさなどについての意見が得られた。「合意形成」のイメージから、「紛争解決」のイメージにまで発展する点は、専門的知識をもってファシリテーターを行った経験から出た言葉であると理解できた。

f)事例H

事例Hは、現在研究機関において、合意形成に関する研究を行っている。以前は、某コンサルタントに在籍し、合意形成のマニュアルを作成したり、教育プログラムの開発及び実践、事業現場でのファシリテーターなどを行っており、様々な経験を持つ専門家である。

この研究会の中でも、最も知識・経験値共に高い者といえる。

そのため、専門用語から哲学的な思想にいたるまで、20を超える語句が連想された結果が得られている。「合意形成」という刺激後に対し、その概念が「交渉学」、「経済学」、「心理学」といった分野横断的に発展している等の考えが、連想され、それぞれ、方法論や精神論としてクラスター構造を成していることが理解できる。

また、事例Hも事例Gと同様に「紛争解決」という言葉が連想されていることも特徴的であり、解釈の議論の中で、Gと同様に、経験からくる苦悩を含めた、「合意形成」の難しさや、「紛争」に至らないようにするための方法などについての意見が述べられた。

4. 「合意形成」のイメージ比較

結果から、対象者の経験や知識度により連想される語句に特徴が見られることが確認された。

学生から出てくる言葉は、専門用語にプラスされた自己の研究課題に関する疑問。漠然とした「合意形成」に関する知識欲。つまり、彼らの「合意形成」のイメージは、学問的なイメージが強く、「合意形成」そのものに対する関心も高く、その必要性も感じているが、何が重要で、何が求められているのか研究を通して模索していると考えられる。

学生を指導する立場からは、「合意形成」の専門的意味を通した、概念の整理がされたクラスター構造が見られ、理論上の「合意形成」に対するイメージが確立されていることが理解できる。しかし、経験から得られている理論と現状の「合意形成」に対する葛藤したイメージもあると思われる。

一方、行政関係者は、「合意形成」のイメージが明らかに事業実施側の立場として確立されていることが理解できる。また、学生や大学関係者と同様に、「合意形成」そのものの必要性については、イメージの中に混在しており、現場での「合意形成」の難しさがイメージの中心となっていると考えられる。

専門家は、学生や行政関係者の意見を網羅した語句が多く見受けられ、いろいろな立場や自身の経験などを通した「合意形成」イメージを確立していることが分かった。そして、「紛争」という、「合意形成」とは似て否なるものではあるが、「合意に至らなかった場合」の最悪のイメージも「合意形成」のイメージの中に混在していることが確認された。

5. まとめ

このように、「合意形成」という刺激語から、そのイメージを8名の対象者から抽出し、そのイメージ構造をクラスター分析と議論により解釈していった。

その結果、全員に共通している連想語は、「必要性」であるが、「合意形成」に対し、どのようにすべきか、何が必要なのか、具体的には?といった点について、「合意形成」のイメージから連想される「課題」を模索している結果が得られている。その模索の範囲が、対象者の各々の立場や経験値から異なっており、自身の研究範囲からの模索している課題、立場上で模索している課題、経験測からの想定された課題の模索であった。それらの課題は、現在の「合意形成」というひとつの枠組みでは、科学的に実証できるものではなく、どちらかとい

えば、経験測に従い、それぞれが持っている知識、「交渉学」、「心理学」などのツールの使い方に関する知識を応用して、これからどうにかして解決しようとしていることが、議論の中で理解できた。

「合意形成」というひとつのキーワードから、連想される言葉は、立場や経験により、異なることは、今回の調査で理解できた。しかし、立場が異なっても、その必要性は誰もが認めており、それぞれの持っている知識や経験をどうにかすべきかについて、迷いが見られた。

その理由は、本調査では、統計的に明らかにできなかったが、本調査の結果は、対象者間での議論を通して推察すると、「合意形成」に最低限必要な概念や分野横断的に用いることができるツールを模索した上での結果であるが故のものであったのではないかと筆者らは考えている。

6. 今後の課題

「合意形成」に関する研究を行っている、複数名の対象者間においても、そのイメージは個々の経験や知識、何をベースに学んだかによって異なることが理解できた。

今後、「合意形成」には何が必要で、どのような知識を求められているのか、研究者の側が考えていく必要があるのではないだろうか。互いの学んだ知識や経験から、「合意形成」を促進させるための方法論や概念の共通性を理解し、分野横断的な合意形成手法の確立に向け、事例、研究者間の意志疎通を通じた研究会を促進していきたいと考えている。

謝辞

本調査にご協力いただいた、合意形成入口知識研究会のメンバーに深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 1) 内藤哲雄：同性・異性への好意と嫌悪, 日本社会心理学第32回大会論文集, 1991.
- 2) 内藤哲雄：個人別態度構造の分析, 信州大学人文科学論文集 信州大学人文学部, 27, pp. 47-69, 1993.
- 3) 内藤哲雄：PAC分析実施法入門「改訂版」『個』を科学する新技法への招待, ナカニシヤ出版, 2002.